



TITLE:

心理臨床における＜私＞を生きる  
という視点の意味―「水平性をめ  
ぐる動き」と「垂直性をめぐる動  
き」から―(Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

小山, 智朗

---

CITATION:

小山, 智朗. 心理臨床における＜私＞を生きるという視点の意味―「水平性をめぐる動き」と「垂直性をめぐる動き」から―. 京都大学, 2019, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2019-07-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13264>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（教育学）	氏名	小山 智朗
論文題目	心理臨床における＜私＞を生きるという視点の意味 ー「水平性をめぐる動き」と「垂直性をめぐる動き」からー		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、心理臨床の領域における「私」について、心理療法を通して立ち現れる「世界や他者を対象として認識し、能動的に働きかけるのと同時に、他者や世界からの動きも受け入れ、緊密に関わり合う体験を通して、絶えず自らを変化させていく主体」と定義した＜私＞として、その生きるという視点から、事例研究を通して検討したものである。第1章では、まず「私」という言葉を用いた心理臨床学の研究を概観し、その意味や他者との関わり合いの様相について理解を深め、上記の定義づけを行っている。この＜私＞について、自らの可能性を最大限生き、他者や世界と関わり合う体験を通して一生を通じて絶えず自らを常に変えていくものと考え、＜私＞を「生きる」というテーマで展開することとしている。第2章では、＜私＞という概念と関連の高い「自我」「自己」「主体」「アイデンティティ」といった心理学的概念と比較しつつ、＜私＞の特徴について理論的な検討を行った。また本研究の次なるキーワードとなる＜私＞の動きに対する視点として「水平性をめぐる動き」、「垂直性をめぐる動き」を第3章で提示した。前者は、「他者や世界と関わり合う動き」とし、他者や世界との体験の中で直接的に直観していくようなものである。後者は、「世界や他者を認識する動き」と考え、垂直上方から鳥瞰的に認識するように他者や世界と距離を置いて客観的に対象化していくという2つの観点を提示している。</p> <p>第4章からは臨床事例を提示し、＜私＞を生きるプロセスについて具体的な検討を行っている。まず自閉症スペクトラム障害を抱える小学生男子の事例をとりあげた第4章では、＜私＞という視点があることで、この問題を抱えた子どもが他者や世界と緊密に関わり合う中で変化していく動きを積極的に捉えられることが示された。第5章では神経症的様態を抱える中学生女子の事例をもとに、この視点から、世界や他者と分離して対象として認識していく動きに加えて、他者や世界と関わり合う動きを兼ね備えた、「主体も世界も」という位相へのプロセスを見通せることが示唆された。さらに第6章では母親面接の事例を提示し、＜私＞という視点は、特定の年令や発達段階にあるクライアントだけでなく、成人期の事例を検討する上でも重要であることが示唆された。これらを踏まえて第7章でセラピストの関わりについて、総合的な考察を行っている。セラピストは、苦難を伴う＜私＞を生きるプロセスを支えるためにクライアントの生きる世界に身を置き、共に体験を深めていく必要があると考え、著者自身が面接中にヴィジョンを体験した事例を検討した。＜私＞は他者や世界との関わり合いの中で変化していくと考えており、当然セラピストの＜私＞もクライアントとの相互関係の中で影響を受けると考えられる。セラピスト自身の＜私＞も一旦解体し、再び生成するような痛みや体験を示していった。このセラピストが＜私＞を生きるという視点によって、セラピストの内的体験自体、またその体験を自らの内で深めることに創造的な意味があることが明らかになった。</p> <p>最終章では、＜私＞は同一の状態が半永久的に連続するものではなく、世界や他者との体験を生き、自らのありかたを一旦解体し、状況に応じて再び柔軟に変化させていくものであることと主張する。最後に各事例研究で検討を進めた否定性について、＜私＞を生きるプロセスに伴って生じる産みの苦しみの表現であるという考えを示している。加えて、否定性における創造性について、＜私＞のありかたの変化と共に考察され、今後の課題を添えて、本論文は締めくくられている。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

心理臨床領域における事例がすべて「私を問う」といっても過言ではない。本論文は、そうした私というものについて、著者によって、長年の教育臨床機関における実践経験から産み出された知として、＜私＞を生きるという視点から多角的に分析し、探求した結果がまとめられている。本論文に関して審査を行った結果、高く評価できる点については、次の4点にまとめられる。

まずは、哲学や教育学、心理学、さらには心理臨床学において考察が行われてきた「私」について、あらためて概念整理をし、＜私＞の動的な側面を重視して新たな探求を行った点である。次にその理論展開として素材となるさまざまなクライアントとの心理療法過程をもとに多角的な検討を行っているところであり、特に＜私＞の「水平性をめぐる動き」、「垂直性をめぐる動き」の二方向からの考察は、独創的といえる。第3には、各事例の検討において「否定性」という視点を加え、一見すると各事例のプロセスとしてはマイナスになっていく観点を創造的に考察していったところである。そして4点目として、著者自らの＜私＞についてもヴィジョン体験という斬新な視点を与えることで、治療関係における考察を深めていくことを可能にさせている点である。

次にこれらの4点に沿って、本論文の各理論ならびに事例検討について詳述していく。第一の点としての＜私＞の再定義であるが、丁寧な先行研究のサーベイがなされ、日常語としての豊かな意味を見出しつつ、洗練された見方を持ってまとめられている。特に著者は、＜私＞について、世界や他者を客観的に認識し、能動的に行動するという近代主体的なありかたを備えつつ、加えて他者や世界との相互関係に開かれ、その体験の中で認識や行動を新たにしていくものとして考えている。この観点が本論文に一貫して見出され、その例証としての臨床素材が生き生きと描かれている。そして＜私＞を生きるプロセスが、他者との関わり合いや世界との相互作用において絶えず新たな＜私＞へと刷新され、一生続くと結論づける流れに向かっていく。このために第2の点としてあげた「水平性をめぐる動き」、「垂直性をめぐる動き」の二方向からの検討が必要となる。前者の動きを事例によって検討する中で、他者との関わり合いを重視し、能動的な側面のみならず、他者をいかにして受容し＜私＞が生きる上に組み込んでいくかという様とも理解できる。また後者の動きは、ともすると自分の視野が狭くなり、他者との距離感を喪失してしまう、あるいはそれを増大してしまうところを客観視していく動きと捉えられる。この両者の絡み合いから理解していくクライアントの回復過程の考察は、極めて臨床的に貢献度の高いものと評価できる。

第3にあげた観点は、自閉症スペクトラム障害を抱えた男子児童、神経症の問題を抱えた思春期女子事例、子どもの問題で来談した母親との面接といった幅広いクライアントとの関わりを臨床素材としてあげているところである。これらの臨床素材から、問題の要因や年代、さらには関わりの媒介(遊戯療法、心理療法)、面接構造(クライアント自身の問題改善を目的とした面接、子どもの問題改善を目的とした母親面接)とさまざまな背景を持つ、多様な＜私＞の生きるプロセスを示すことを可能にしている。さらにそこに＜私＞を生きるプロセスの中に見出される否定性について、そこには創造的な意味があり、他者や世界と距離を置いて対象化する「分離」の働きと他者や世界との「つながり」の働き、その2つの働きがあることについて論じている。セラピストがそれを受けとめることで「つながり」の働きが促され、＜私＞のありかた自体を変化させることが考察される。そしてすべての事例が順調に回復するのではなく、行きつ戻りつしながら創造的に自己を形作っていくありようを描いているのである。さらに著者自身が＜私＞を生きる体験について臨床ビネットを素材として述べ、セラピスト自身がクライアントとの関わりにおいて、一旦解体させられるような体験

から、再び＜私＞を生成する臨床的営みについて考察している点である。これは、これまで語られてきた「逆転移」という概念をさらに人間学的に包含してまとめ上げる論考となり、心理臨床の実践論文としての意義を見出せる。

試問では、本研究の主題としての＜私＞の定義をする際に、他の概念を統合する動きと、否定し、切り捨てる動きの是非、水平性の動きを重視するセラピスト自身が、その中に立ち現れる垂直性の動きを掬い上げることの重要性について、議論が交わされた。また各事例の診断について、それを重視せずにライフサイクルの歩みにそって記述する方法の再考などについて討論が進められた。しかしながらこれらの点は、本論文が心理臨床学におけるさらなる発展の可能性や、事例の経過を十二分に活かし、生きた心理臨床実践研究として、今後の大きな飛躍への布石となるものと評価されたものであり、その価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年 5 月 9 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：                      年              月              日以降